

発見! 熊野町の「エエ」ところ。 シリーズ 第2弾

今、各地で地元を見直す動きが強くなっています。各地にある名所や名物。もちろん熊野町にもたくさんあります。そんな町内に埋もれた、さまざまなモノ・場所などの「エエところ」を紹介して、発見、再確認していく新コーナーです。今回は「中溝地区」からのレポートです。

中溝ギャラリー「あとりえMEUDON」オープン!

「わあ、きれいだ!」

一歩入るなりそんな会話が聞こえてくる。



ここは、9/23の筆まつりに合わせてオープンした「あとりえMEUDON」。 「ムードン」とは、絵画の下地材として使われる白い顔料のこと。「ギャラリーの壁が白く、何事においても下地が重要と考え、地域に根ざした芸術文化の下地をつくりたい、という思いからこの名前をつけました。」と、筆の里工房美術研究員としてこの町に來られ、このギャラリーのオーナーでもある松村卓志先生(28才)は語る。

15畳程のスペースを地域の方々やアイデアを出し合い、地元の大工さんも協力しながらすべて手作りで改装した。慣れない手作業で完成した白い壁と黒い梁が印象的なこのギャラリーには、松村先生のレアリズム(写実主義)の油絵がとてよく似合う。

中心市街地活性化を目的として熊野町商工会が「熊野ネオ&レトロ」事業を始めたのが昨年。2年目の今年は、中溝通りと筆の里工房をつまぐリンクさせ、かつアートも取り入れる計画だ。このギャラリーは、その情報発信源的な役割を持つ。

筆まつり当日のオープニングイベントでは、津軽三味線ライブが行われ、あいにくの雨にもかかわらず多くの人々が、若者の演奏する珍しい音(と足)をとめていた。

また、「熊野ネオ&レトロ」事業と平行して推進している「JAPANブランド・U・D・Eプロジェクト」事業のプレイベントとして、ギャラリー入口において、熊野筆を海外仕様にデザインした「絵てがみ筆」のワークショップも行われた。本番は来年の1/28〜2/1の5日間。パリで開催される世界的規模の見本市「メゾン・オブジェ」に熊野筆を出展する。これまでにない展開で要注目といったところだ。

筆まつりが終わったいまでも、中溝地区はまだまだ熱い。筆の里サポーター会議やネオレトロワーキング委員会などが住民に

呼びかけて、来年度の筆まつりに向けて「彼岸花の球根の植え付け作業」を始めている。また、10/23(土曜日)には、中溝ふれあい公園にて「第1回ふれあい祭り」を開催。これにあわせて町内の小学生から名前を公募し決定した「なつかしせり市」を開き大盛況であった。次回開催は11/23(火曜日)を予定とのこと。

「あとりえMEUDON」は毎週日曜日午後から開館。今後は、商店街のシャッターのれんなどに使う絵画の指導を、子ども達に行うなど魅力的な活動が盛りだくさん。なお、彼岸花の球根は、当ギャラリーにて現在も受付中とのこと。

次の日曜日には球根片手にぜひ一度訪れてみてはいかがだろうか。

(記者) 議会広報委員 伊藤真由美



市立大学教授野田弘志先生による題字

